

令和 6 年 9 月 25 日現在

機関番号：33707

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02922

研究課題名（和文）社会性の発達に困難を抱える子どもの早期支援・特別支援教育に関するコホート研究

研究課題名（英文）The cohort study on early support and special needs education for children with social developmental difficulties

研究代表者

別府 悦子（Beppu, Etsuko）

中部学院大学・教育学部・教授

研究者番号：60285195

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：過去3度にわたって科学研究費の助成を受け乳幼児のコホート研究を行ってきた。その中で乳幼児健康診査において、M-CHAT（乳幼児期自閉症チェックリスト修正版）を活用したままごと遊び観察が支援の必要な子どもの早期発見に有用な観察であることが明らかになるとともに、支援の課題となる所見を示した。また、就学期において保護者に対しSRS-2（対人応答性尺度）、SDQ（子どもの強さと困難さアンケート）を調査した。こうした3期10年（1年延長）の研究成果を、学会等で公表してきた。そして、DVDの教材を作成し、関係自治体や研究者に配布を行い、今期は研究成果を出版物として刊行し研究成果の還元を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自治体と連携をしてコホート研究を行い、3期にわたり研究成果を発表してきた。各地の自治体は障害や育てにくい子どもの早期発見の充実のために、乳幼児健診等でさまざまなツールを援用し、育児支援や学校教育への接続に活かしている。本研究では研究協力自治体と共同研究を継続し、データの分析をもとに学術的見地から発信してきた。そして研究成果を支援の必要な子どもの早期発見や子育て支援に還元できるよう、報告してきた。さらに、他の自治体でも活用できるDVD教材として作成し、早期発見、早期支援に必要な学術的内容を含めた解説のための著書を刊行した。こうした研究成果の発信を社会実装につなぐよう努めている。

研究成果の概要（英文）：We have conducted a cohort study of 435 infants and toddlers three times in the past, with the support of the Grant-in-Aid for Scientific Research. During the study, we found that observation of pretend play using the M-CHAT (Modified Infant Autism Checklist) during infant health checkups was useful for early detection of children who need support, and also showed findings that could be issues for support. We also surveyed parents of children at the school-age stage with the SRS-2 (Social Responsiveness Scale) and SDQ (Child Strengths and Difficulties Questionnaire). We have published the results of this research over three periods of 10 years (with one year extension) at academic conferences and other events. We have also created educational DVDs and distributed them to relevant local governments and researchers, and this term we have published the results of our research in a publication to give back to the community.

研究分野：特別支援教育

キーワード：ASD 社会性の発達 乳幼児健診 早期支援 特別支援教育 M-CHAT ままごと遊び コホート研究

1. 研究開始当初の背景

特別支援教育が進展し、疾病・障害や発達障害などの特別なニーズをもつ児童生徒への合理的配慮が行われている。しかし、その一方で、学校や家庭などの生活に不適応を抱え、メンタルヘルスの不調を抱えたり、依存症や精神疾患、引きこもりなどの問題を抱える子どもの問題が深刻化している実情がある。その中には、知的発達に遅れのない、あるいは遅れが軽いが、ASD(自閉スペクトラム症)など社会性の発達に困難を抱える子どもたちが未診断、未対応のまま学齢期や青年・成人期を迎えることによって、そうした問題を二次的に抱える場合も少ないことが報告される(神尾、2013 など)。子どもたちがよりよい予後を達成するためには、早期発見や早期介入の検討とその効果を示していくことが一層求められている。その一助として、早期介入をライフスパンで追跡的研究(コホート研究)を行い、それが長期予後にどのような影響をもたらすのかについてのエビデンスを蓄積していきつつ、こうした課題を検討していくことが求められている。

我々は、3度の科学研究費助成事業によって、ある自治体の多大な協力のもと、435名の乳幼児のコホート研究を行ってきた。そこでは乳幼児健康診査(乳幼児健診と記す)のデータを収集し、そのデータについての前方視的、後方視的分析を行ってきた。

第1期の平成25年~27年度科学研究費補助金研究(課題番号:25381327、研究代表者:別府悦子、以下「科研費研究25381327」と記す)では、M-CHAT(Modified Checklist for Autism in Toddlers:乳幼児期自閉症チェックリスト修正版)の項目を活用した「ままごと遊び」観察が支援の必要な子どもの早期発見に有用な観察であることが明らかになるとともに、支援が必要と抽出されたグループの子どもに乳児期に運動発達や手指の微細運動の遅れが見られる傾向にあることが示された。

また、第2期の平成28年~30年科学研究費補助金研究(課題番号:16K04849、研究代表者:別府悦子、以下、科研費研究16K04849と記す)において、対象となる子どもの保護者の80%を超える回収率のもと、SRS-2(Social Responsiveness Scale:対人応答性尺度)SDQ(Strengths and Difficulties Questionnaire:子どもの強さと困難さアンケート)のデータを収集した。そこで、1歳6か月児健診と2歳児健診時点での「ままごと遊び」観察で社会性の発達に困難を抱える懸念のある子どもたち群と懸念のない子どもたちの群が、5歳児就学児健診時にどのような発達の特徴の差があるかを検討した。その結果、子どものタイプによって、健診後に良好な変化があっても、集団生活の適応に困難を抱える場合や、療育の効果により対人関係の発達に好影響をもたらす事例があることが判明した。

障害児の早期発見と早期対応については、その意義も確かめられ、自治体でそれぞれのシステムが作られているが、本研究は知的発達に遅れがない、あるいは遅れが見られにくいために「気づき」に困難を抱える、社会性の発達に支援が必要な乳幼児の早期発見と早期支援の方法の開発をさらに進めていくことを、1期、2期に引き続き取り組んだ。

ASDなどの発達障害の早期支援は、子どもの発達や家庭生活、学校生活での機能を高め、成人後の社会参加等のアウトカムの向上につながることはコンセンサスとなっている(神尾2018など)が、そのための早期発見やこれらのアセスメントの有効性については、まだまだ十分とは言いがたい。これを明らかにし、社会に還元していくための一つの方法としてコホート研究が有効とされるが、土屋(2012)は、コホートや診断についてはプライマリーケアにおけるアセスメントが十分に確立されていないことを指摘する。また、乳幼児健診等の厚生行政

において地域格差の問題等から難しいことが指摘され続けている。一方で、M-CHAT や SRS(対人応答性尺度)などの有効性が国際的にも提唱されており、わが国で標準化が行われているが、こうした知見や研究の成果が自治体の施策に十分活用されているとは言いがたい現状もある。

こうした研究背景や問題意識から、10年近くのコホート研究を継続し、新たな研究を実施することで、ASDなどの社会性の発達困難を抱える子どもたちの発達研究や予後を見据えた早期発見、早期対応についての社会実装に必要な事項を提案していくことが、本研究の意義である。

2. 研究目的

上記、研究の必要性に沿って、下記の3つの研究目的を設定した。

【目的1：社会性の発達に困難を抱える子どもの早期発見の方法としての M-CHAT の項目を活用した「ままごと遊び」観察の有効性の検証】

研究協力者の神尾陽子は、社会性の発達に困難を抱える子どもの早期発見のためのアセスメントとして、M-CHAT (Modified Checklist for Autism in Toddlers: 乳幼児期自閉症チェックリスト修正版) をいくつかの自治体の乳幼児健診場面で活用し、その有効性を検証している。岐阜県本巣市では、乳幼児健診場面でこの M-CHAT の項目を活用した「ままごと遊び」の観察を行って早期発見と子育て支援に努めている。科研費研究 25381327・16K04849 において、これが支援の必要な子どもたちの早期発見に有効な観察であることが明らかになった。この研究成果をふまえ、さらなる検討を行う中でその有効性を検証することが一つ目の目的である。

【目的2：社会性の発達に困難を抱える子どもの発達の研究をふまえた支援】

子どもの発達の一つの領域からとらえるのではなく、他領域からの発達の様相をふまえて、全体の中での連関を明らかにすることで、支援の方法を検討することが必要とされている(業績連携 7.9)。科研費研究 25381327 では、M-CHAT の項目を活用した「ままごと遊び」観察で支援が必要と抽出されたグループの子どもが4か月児健診、7か月児教室、10か月児健診において、運動発達や手指の微細運動との項目に相関が見られることが明らかになった。こうした子どもたちの支援を充実させていくために、障害の早期兆候や発達の特徴を探り、どのような介入方法が有効かを検証していくことが二つ目の目的である。

【目的3：研究成果をもとに社会実装を行う】

自治体のコホート研究で検証してきた、ASDなどの社会性の発達に困難を抱える子どもの早期徴候の発見や早期支援の研究成果を社会実装に役立てていくために、研究成果の発信と、他の自治体との相互検討を行い、位置づけを考えていくことが三つ目の目的である。ことに、岐阜県本巣市では、子育て支援のツールとして、乳幼児健診時に「ままごと遊び」の観察をはじめさまざまな支援や介入法を開発しており、科研費研究 16K04849 では DVD のデジタルコンテンツを作成したが、これが他の自治体等でも汎用できるかを検討し、社会実装に生かしていくことを目的の3とした。

3. 研究方法

以上の研究目的をもとに、下記の研究方法で研究を遂行した。

【研究方法1：前方視研究と後方視研究をふまえた「ままごと遊び」の有効性】

乳幼児健診に M-CHAT の項目を活用した「ままごと遊び」観察を導入した効果を、研究で得られた知見をもとに検討を行う。1歳6か月児健診と2歳児健診時点での M-CHAT を活用し

た「ままごと遊び」観察のデータの分析をもとに、再検討を行い、研究目的1で掲げた「ままごと遊び」の行動観察の有効性についての検証を行う。そのために、科研費研究 25381327 において支援が必要だとされた子どもの過去の健診でのデータの振り返り（前方視的研究）と健診後のデータの追跡調査（後方視的研究）を行うことにより、乳幼児健診における M-CHAT の項目を活用した「ままごと遊び」の観察の有効性を検証する。

【研究方法2：複数の地域を対象とするコホート研究の実施】

研究協力者の神尾陽子らは、就学前に ASD 特性を評価することは、就学後の ASD 特性や他の情緒的・行動的問題の併発を予測するのに役立つ可能性がある（Saito et al. 2017）とし、東京都多摩地域でコホート研究を行っている。今回は、岐阜県本巣市に加え、多摩地域のコホート研究の結果をもとに、社会性の発達に困難を抱える子どもの就学時期と乳幼児期の発達とを関連づけて分析し、複数の地域のデータを比較照合することによって、その特徴を明らかにする。

【研究方法3：社会実装に生かすコホート研究の実施と成果の還元】

科研費研究 16K04849 では DVD のデジタルコンテンツ を作成し、関係機関や自治体に配布を行った。こうした本研究の研究成果を国内外の関係学会等のシンポジウムや学術講演会等で発信し、学会誌や紀要論文、著書に執筆していくことを通して、社会実装に生かしていくことが3点目の方法である。

4．研究成果

研究目的1をふまえた研究方法1の M-CHAT の項目を活用した「ままごと遊び」観察の効果については、対象児の継続的な追跡調査を研究協力者の北川小有里が行い、2021年に別府悦子・宮本正一・別府哲・北川小有里・野村民子「社会性の発達に困難を抱える子どもの就学移行期の特徴 自治体の乳幼児健診をもとにしたコホート研究をもとに」日本発達心理学会第32回大会（Web開催）、および、2022年に別府悦子・北川小有里・宮本正一・原口英之・神尾陽子・別府哲「社会性の発達に困難を抱える子どもの就学期の特徴と支援 - 2 地域のコホート研究をもとに -」日本発達心理学会第33回大会ラウンドテーブル（東京学芸大学：Web開催）において報告を行った。

ここでは、保護者に対して就学時における SRS - 2（Social Responsiveness Scale：対人応答性尺度）、SDQ（Strengths and Difficulties Questionnaire：子どもの強さと困難さアンケート）をもとに、実施したアンケート調査の結果を報告した（別府他、2021年）。そこで、1歳6か月児健診と2歳児健診時点での M-CHAT の項目を活用した「ままごと遊び」観察で社会性の発達に困難を抱える懸念のある子どもたち群と懸念のない子どもたちの群が、5歳児就学児健診時にどのような発達の特徴の差があるかを検討した。

また、Fig.1のように、M-CHAT の項目を乳幼児健診の間診項目への導入や、M-CHAT の項目を活用した「ままごと遊び」観察を導入したことで、早期（3歳児健診前）に療育や医療へつながる割合が増加したことなどの研究成果を報告した。

研究目的2をふまえた研究方法2については、後方視研究として、保護者に対して就学時における SRS - 2（Social Responsiveness Scale：対人応答性尺度）、SDQ（Strengths and Difficulties Questionnaire：子どもの強さと困難さアンケート）をもとに、実施したアンケート調査の結果を再分析し学会で報告した（前述の学会：別府他、2021年）。そこで、1歳6か月児健診と2歳児健診時点での M-CHAT の項目を活用した「ままごと遊び」観察で社会性の発達に困難を

抱える懸念のある子どもたち群と懸念のない子どもたちの群が、5歳児就学児健診時にどのような発達の特徴の差があるかを検討した。その結果、1歳半と2歳時の健診の結果、社会性の発達に困難を抱える子どもは小学校への就学時健診時にもSDQ困難さ得点ではその傾向が持続していたが、SRS-2の高次社会性が顕著に残っていることが認められた。また、健診後に良好な変化があっても、集団生活の適応に困難を抱える場合や、療育の効果により対人関係の発達に好影響をもたらす場合のあることが判明した。

一方、研究協力者の神尾陽子らは、東京都多摩地域でコホート研究を行い、SRS-2による5歳時のASD特性が、8歳時のASD特性を予測することを明らかにした(Haraguchi et al. 2019)。就学前にASD特性を評価することは、就学後のASD特性や他の情緒的・行動的問題の併発を予測するのに役立つ可能性がある(Saito et al. 2017)。こうした2地域のコホート研究の結果をもとに、社会性の発達に困難を抱える子どもの就学時期と乳幼児期の発達と関連づけて分析し、学会で報告を行った。この報告の中で、学校教育接続にあたっての支援課題と自治体の乳幼児施策の展望を検討した。

研究目的3ふまえた研究方法3については、日本発達心理学会第33回大会のラウンドテーブルにおいて、「乳幼児健診におけるアセスメントの役割と活用について—M-CHATと新版K式発達検査を中心に」というテーマで、別府悦子・稲田尚子・清水里美・北川小有里・神尾陽子・黒田美保が報告を行った。そこでは、M-CHATの概要と有効性および乳幼児健診での導入方法、新版K式発達検査についての乳幼児健診や発達相談での活用方法についての報告を行った。そして、岐阜県本巣市の乳幼児健診・児童発達支援の中でこれらのアセスメント方法をどのように活用しているかについて報告した。

子どもたちが乳幼児期から早期に適切な支援を受け、どこに住んでいても発達や健康が守られ、家族が安心して子育てに取り組めるようなシステムを構築することが、母子保健行政に求められている。その一助として、乳幼児健診の役割を向上させていくための内容面、ことに発達評価と支援の充実が重要といえる。本研究の成果を社会に発信していくことが重要と考え、科研費研究16K04849で作成したDVDを挿入した単行本を研究分担者・研究協力者とともに編集・執筆し(Fig.2)、科学研究費助成研究事業により刊行した。

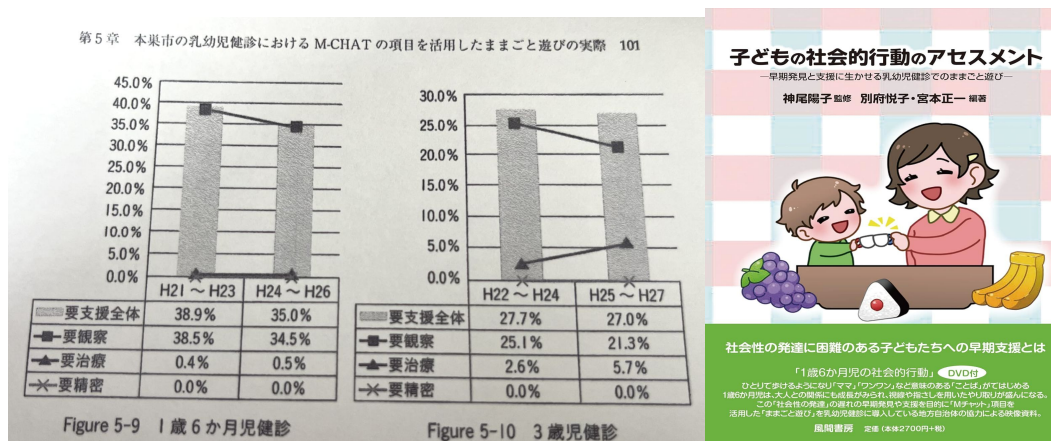


Fig. 1 M-CHATの項目を乳幼児健診の問診項目への導入およびM-CHATの項目を活用した「ままごと遊び」観察の導入による効果



Fig.2 科研費助成研究の成果物(別府悦子・宮本正一編著、神尾陽子監修「子どもの社会的行動のアセスメント」(北川小有里・堀島由香、2023)(風間書房)2023年4

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Hidenori Yamasue, Takashi Okada, Toshio Munesue, Miho Kuroda, et al.	4. 巻 25(8)
2. 論文標題 Effect of intranasal oxytocin on the core social symptoms of autism spectrum disorder: a randomized clinical trial	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 MOLECULAR PSYCHIATRY	6. 最初と最後の頁 1849 - 1858
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒田 美保	4. 巻 11(1)
2. 論文標題 コミュニティでの支援を実現するJASPERプログラム	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 子どものこころと脳の発達	6. 最初と最後の頁 28 - 34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 別府悦子	4. 巻 47-1
2. 論文標題 自閉症・情緒障害特別支援学級の教育と発達保障	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 障害者問題研究	6. 最初と最後の頁 18-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 別府悦子・大井佳子・水野友有・谷昌代・ダーリンブル規子・平野華織・山田丈美・齋藤英俊・西垣吉之	4. 巻 第21号
2. 論文標題 統合保育からインクルーシブ保育への展開のための実践的視点 大学間連携共同研究（1）-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中部学院大学・中部学院大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 1 - 12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Owada, K., Okada, T., Munesue, T., Kuroda, M., Fujioka, T., Uno, Y., ... & Yoshimura, Y. Quantitative facial expression analysis revealed the efficacy and time course of oxytocin	4. 巻 142(7)
2. 論文標題 Quantitative facial expression analysis revealed the efficacy and time course of oxytocin	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 autism. Brain	6. 最初と最後の頁 2127-2136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ochi, K., Ono, N., Owada, K., Kojima, M., Kuroda, M., Sagayama, S., & Yamasue, H.	4. 巻 14(12)
2. 論文標題 Quantification of speech and synchrony in the conversation of adults with autism spectrum disorder.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 PloS one	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋美保, 黒田美保, 田川薫, 中山奈緒子, 馬場絢子, 野村佳申, & 林さらさ	4. 巻 19(6)
2. 論文標題 成人の自閉スペクトラム症傾向者の多面的評価尺度の開発: 生活能力・就労能力および自閉スペクトラム症特性を測定するための簡易型尺度	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 臨床心理学 (Japanese journal of clinical psychology)	6. 最初と最後の頁 725-736
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒田美保, 森裕幸	4. 巻 17(2)
2. 論文標題 家族がアセスメントを有効に使えるために知っておいて欲しいこと (保護者の関わり方を考える: 親がどういう働きかけをすることがいいのか)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Asp heart=アスペハート: 広汎性発達障害の明日のために	6. 最初と最後の頁 42-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒田美保	4. 巻 67(7)
2. 論文標題 乳幼児・小児期における自閉スペクトラム症のアセスメント (特集 最新の発達障害支援).	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育と医学	6. 最初と最後の頁 540-546
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本正一	4. 巻 2019年度版
2. 論文標題 特別支援教育における保護者と教師の連携	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 育ちと学びをつなぐ幼児教育の推進(岐阜県幼稚園教育研究協議会)	6. 最初と最後の頁 152-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 別府哲	4. 巻 67-7.8
2. 論文標題 自他理解と発達障害支援	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育と医学	6. 最初と最後の頁 50-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神尾陽子	4. 巻 33(9)
2. 論文標題 発達障害を理解する Caseに学ぶ典型例と対処法：自閉スペクトラム症 (ASD)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 総合診療	6. 最初と最後の頁 041-1045
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻あゆみ・別府哲	4. 巻 44(2)
2. 論文標題 自閉スペクトラム症児における交替的やりとりの発達	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 心理科学	6. 最初と最後の頁 103 - 122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 別府哲	4. 巻 23(5)
2. 論文標題 発達を情動から考える 自閉スペクトラム症を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 522 - 526
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 別府悦子・別府哲	4. 巻 25
2. 論文標題 障害者施設における強度行動障害への支援に対する支援者支援の役割	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 中部学院大学・中部学院大学短期大学部紀要	6. 最初と最後の頁 1 - 12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 別府悦子・宮本正一・北川小有里・原口英之・神尾陽子・別府哲
2. 発表標題 社会性の発達に困難を抱える子どもの就学期の特徴と支援—2地域のコホート研究をもとに—
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会（ラウンドテーブル）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 別府悦子・北川小有里・宮本正一・黒田美保・神尾陽子
2. 発表標題 社会性の発達に困難を抱える子どもの早期発見と発達支援－アセスメントと支援ツールの役割と課題－
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会（中止・紙上開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 秋野竜也, 加戸陽子, 諏訪利明, 井上雅彦, 黒田美保
2. 発表標題 実行委員会企画シンポジウム 自閉症スペクトラム児の支援法最前線 (特集 生活者という視点からの発達支援 : どんな生きづらさを抱え, どう生きるのか) Symposium by Council Member's Committee : Recent Progress in Research on Supports for Children with Autism Spectrum Disorder.,
3. 学会等名 日本発達障害学会第54回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 別府悦子・稲田尚子・清水里美・北川小有里・神尾陽子・黒田美保
2. 発表標題 乳幼児健診におけるアセスメントの役割と活用について－M-CHATと新版K式発達検査を中心に－
3. 学会等名 日本発達心理学会第35回大会（大阪・ラウンドテーブル）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 下山晴彦・伊藤絵美・黒田美保・鈴木伸一 編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 文光堂	5. 総ページ数 896
3. 書名 公認心理師技法ガイド ～臨床の場で役立つ実践のすべて～	

1. 著者名 黒田美保	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房.	5. 総ページ数 162
3. 書名 自閉スペクトラム症のアセスメントと支援（公認心理師のための 基礎から学ぶ神経心理学理論からアセスメント・介入の実践例まで）	

1. 著者名 別府悦子・宮本正一編著・神尾陽子監修	4. 発行年 2023年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 169
3. 書名 子どもの社会的行動のアセスメント早期発見と支援に生かせる乳幼児健診でのままごと遊び	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	黒田 美保 (Kuroda Miho) (10536212)	田園調布学園大学・心理科学部・教授 (32643)	
研究分担者	別府 哲 (Beppu Satoshi) (20209208)	岐阜大学・教育学部・教授 (13701)	
研究分担者	宮本 正一 (Miyamoto Masakazu) (40105060)	中部学院大学・教育学部・教授 (33707)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	堀島 由香 (Horishima Yuka)		
研究協力者	北川 小有里 (Kitagawa Sayuri)		
研究協力者	佐々木 千恵美 (Sasaki Chiemi)		
研究協力者	神尾 陽子 (Kamio Yoko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関